

漢（新）（習字簡）

文字を立派に、美しく書けるように練習すること。上は書聖王羲之から、下は一般知識層の人々まで、筆を執って文字を書くことができたすべての中国人に共通する営みであった。孫過庭が『書譜』にも例を挙げている項羽のように、書は自分の名前さえ書ければ足りる、といって手習いなど全くしなかった人物もいなかったわけではない。しかし、項羽の話が故事として永らく伝えられたことは、これが異例のことであったことを意味していよう。

初歩の段階では、文字そのものを憶えること、すなわち識字を兼ねた学習もあつたであろうし、その人にとって難しいと思われた筆づかいや文字の構えなどを繰り返し練習することもあつたであろう。もちろん、先生が書いたお手本、あるいは古人の筆跡を拓本などで手習うこともあつた。目的や程度の違いはあつても、すべて文字の書き方に関する学習であり、今の日本語という習字にあたる。

習字は、古代殷帝国の甲骨文の時代から今日の二十一世紀の時代まで、脈々と行われてきた。し



かし、習字のいわば生の現場の姿を伝える遺品ということになると、必ずしも豊富に残されているわけではない。習字の跡というのは、遅かれ早かれ、それが行われた後には廃棄される性質のものだからである。

多くの具体例をもって習字の跡を今日に伝えるものとしては、漢代の木簡がある。二十世紀に入ってから、各国の探検隊が西域の砂漠地帯で発見したものであり、被写体が木であり、しかも乾燥地域の土の中に捨てられたものであったために、墨痕あざやかな当時の姿をそのまま伝えることになった。

ここに掲げたのはその一例（同朋舎出版『大英図書館蔵 敦煌漢簡』より）。二十世紀初頭、イギリスの探検家オーレル・スタインが敦煌北郊の漢代の望楼跡を発掘した際に発見したものである。下の部分に小字で「始建國天」とあり、王莽が一時的に打ち立てた新（八〇三）の「始建國天鳳」年間（一四〇一）のものだと推定される。

長さは新しく後漢時代の一尺にあたる二三センチ、幅はその十分の一の二・三センチ。「大」「守」「吏」「使」「始」「兼」「史」「之」「方」「建」「為」「易」「陽」「以」「国」「天」「犬」「可」の十八文字のレッスンである（中央縦の亀裂は後世のもの）。

見ての通り、毛先がよくきく弾力ある小筆で、熱心に手習っている。右払いの波発が大きなポイントのようで、重厚にかつ筆鋒鋭く筆を引き抜くことを繰り返し練習している。「陽」の下部の、

右上から左下に引つ張る四本の線が苦手らしく、「易」だけで書くと何とか工夫できるが、「陽」となると偏に邪魔されてうまくゆかない、といった具合で、この部分の角度や長さや筆圧の変化に苦心している様がよくわかる。今から二千年前の敦煌北郊の望楼で任務にあたっていた下級官吏、しかも自分の文字にまずさを感じていた下級官吏による、余暇の善用の跡でもある。